

台湾の高齢者の意識

— 2005年3月のインタビュー調査から —

析 本 千 鶴

I. はじめに

台湾は人口2,300万人、国土面積36,000平方キロで九州よりやや小さい島国である。台湾の65歳以上の人口は、約211万6千人で、高齢化率は9.2であり、日本の高齢化率19.0（2003年10月現在）の約半分である。しかし、2010年には台湾の高齢者は14.0%の超高齢者化社会に突入する。台湾の高齢化のスピードが日本に似ていて、高齢者の人口が全体の7%から14%になるのに26年しかかからないと言われている（日本は24年）。

高齢化の大きな要因として、1970年代以降の経済発展に伴って、1995年に国民皆健康保険が発足し、健康水準が向上したことである。平均寿命は、2001年には72.8歳、78.5歳（日本は2004年10月78.64歳、85.59歳）¹⁾と延び続けている。

また第二次大戦後国共内戦に敗れた国民党軍が1949年に台湾へ撤退してきており、その数は190万人で台湾の人口の12~14%を占めていた。その兵士たちが高齢者になったことも考えられる。

ところで台湾の高齢者の生活は、日本に比べて安定しているとは言えない。台湾の65歳以上の男性の労働力率は、日本の男性に比べて低く、2000年6月には8.15である（日本34.9 2002年）²⁾。また台湾には一部の者（公務員、教職員、軍人）にしか年金制度がなく、定年退職後の生活は子女の扶養でまかなっている。なぜ高齢者の就職が少ないかの理由として、まず雇用者が高齢者を雇おうとしないからである。1996年の台湾行政院の調査によると今後1年間に高齢者の採用予定は1.34%、採用予定のない企業が98.6%であった。さらに1999年の65歳以上の就業状況は、農林水産業49.41%、卸売・小卸売り・飲食業21.67%を占めている。

台湾では、「養老防老」という儒教的観念の影響がある。子女は老いた両親を扶養するのが当たり前とされている。65歳以上の高齢者の収入源として、2000年の調査で、子女の仕送り47.1%、退職金・保険給付金15.39%、貯蓄等9.26%、就業収入13.72%となっている（台湾内政部統計処 2000年老人の状況報告）。しかし年々子女の仕送りは減少している。一方日本の高齢者世帯の収入源は、年金・恩給69.8%、就業収入19.1%、家賃等5.9%、仕送り3.5%となっており（2002年）³⁾、台湾の高齢者が日本と比べていかに子女の仕送りに頼っているかがわかる。

老保によって支給される老齢給付金は最大45ヵ月の一時金のみである。1995年から農民を対象とする老齢手当金制度により毎月3000 NT\$支給される。2000年現在台湾の平均年間所得は約30万NT\$である。現在老親扶養があたりまえになっているが、今後高齢者の増加により若者が負担しきれなくなることや、女子の高学歴により、社会進出する女性が増加し、出生率の

低下が進むことで、高齢者の不安定要因は大きいと考える。

にもかかわらず、日本と比べ高齢者は概して皆元気である。名古屋地区を中心に保健師として高齢者と公私共に多くの時間を共有してきた著者であるが、台湾を訪れるたびにそんな思いを強くして今日に至っている。そんな思いの中から2004、2005年に台湾の台北市内における高齢者の実態についてインタビュー調査をした。なかでも2004年の予備調査の折、2.28事件と戒厳令さらに日本について積極的に語る人々が多かった。

そこで80歳前後の高齢者、なかでも本省人（台湾人）の彼らにとっては、自らの人生を語るキーワードとなる2.28事件と戒厳令さらに日本の統治下の体験がいかなる意味を持つのか、今の生き方にそれがどうかかわっているのかをインタビューを通じて明らかにしたい。

なお、ここで2.28事件について少しふれておきたい。

50年間日本の植民地であった台湾は、1945年10月に中国からきた蒋介石の率いる国民党軍の支配下に入った。この時から台湾人の国籍は中華民国となり、かつての植民地の住民は、「本省人」と称され、中国から台湾にやってきた中国人を「外省人」として区別された。その後台湾人は、国民党軍の腐敗とどん欲な支配に不満を抱く者が多くなった。台湾が「光復」して1年4ヶ月後に2.28事件に展開したのである。1947年2月27日夕方に外省人のヤミタバコの摘発隊が市中のタバコ売りの女性を摘発し、銃で殴り売上金を没収した。通行人がそれを非難し、その数が膨れあがり、深夜、翌日まで警察、憲兵隊、群集の乱射が続いた。本省人の怒りが爆発し、数十人の死者がでた。翌3月1日には、台湾全土に事件が波及し、弾圧開始が始まり数千人の本省人が殺されたと言われている。なおこの事件は、その後国民党政権下で、長期にわたる白色テロの横行、38年間の戒厳令の施行（1949年より）のひきがねとなった。戒厳令解除（1987年）になって初めて高齢者は、意見を言えるようになったのである。

II. 研究方法

1. 研究対象：本研究は、2.28事件に関係のある本省人の高齢者でインタビューに協力してくれた4名（男性2名、女性2名、その内の2名は夫婦）である。
2. 調査期間：平成17年3月19日～21日
3. データ収集場所：228記念館、私立愛愛院、台北市ホテルで対象者と面接が可能な場所を選定した。面接時間はそれぞれ約1時間であった。
4. データ収集：半構成的面接法で、質問者と対象が1対1で面接を行った。質問項目は、研究者が独自に設定し、2.28事件に関すること、生活等について自由に語ってもらった。面接内容は対象者の同意を得てテープに録音し、後に逐語記録を作成した。
5. データ分析法：面接内容から作成した逐語記録を1行ずつ調べ、「高齢者の意識」で積極性を表す部分をローデータとして抽出した（下線を引いた）。抽出した部分を解釈し、類似性に基づいてサブカテゴリー化した（図1）。サブカテゴリーを更に類似性に基づいて分類し、カテゴリー化した（図2）。
6. 倫理的配慮：対象者に研究目的、プライバシーの厳守、保持を守ること、得られたデータは本研究以外に使用しないこと、研究参加を拒否できることを説明して同意を得た。

図1 インタビューからの抽出

サブカテゴリー	抽出項目
自分の意思の主張	<p> 会いたかった 話したかった 非常に憤慨している 自分たちは、知るのが遅かった 少しきびしかったかもしれないが 一步前で助かった ビルマへ志願した 在宅療養は望まない やるだけのことをやり 遺書を書いて用意してある薬を飲んで帰る 嗜好品等好きなようにさせたら良い 食事をつくらなければならない </p>
社会との関わり	<p> 説明をしておかないと 暴動で終わってしまう 受諾させるのはおかしいのではないか 良くわからなかったのではないか 中国ではないからこうなった 本質を知って欲しい ルーズベルトがうけつけなかったためのもがきの結果である お金がないと入れない 社会に迷惑をかけるようになった 施設の職員から「出て行け」と言われ 入所者はそのころ大陸からの人々で、貧しかった 150元払うくらいで安い 安く買ってきてあげる 親しい人でもいいことしか言わない 入所者についても「みれなくなった」の確認程度である 家庭の中をのぞかれるのではなか」と怒られから難しい </p>
日本人との関わり	<p> 日本は何も話していない 本人と和気藹々とすごしてきた 日本のNHK番組をいつも見ている 日本の植民地政策がいかに良いかがわかった 今でも日本人だとおもっている 120倍がもどってきただけである 日本の教育は間違っている 日本人に道徳を教えている 手紙を約100通出した 日本人がくると母が喜んで接待していた </p>
家族との関わり	<p> 息子の笑顔がうれしくてもらっている 妻と一緒に参加している 妻と一緒に散歩している 催促はしない 悩みの種となっている 子供に迷惑がかかる おろおろして </p>
健康との関わり	<p> 資料を捜すのに苦勞をしている 調子が悪いときは絶食で治す 予防に努めている 血圧と血糖（米国の試験紙）を測定し 検診をしないし、医者にも行かない 健康であれば病院へ行かない </p>

Ⅲ.インタビューによる記録

以下は忠実にテープをおこした。一部日本語として適切でなかったり、正確さを欠くところがあるが、あえてそのままにした。またインタビュー者全員が氏名の掲載意思表示があったが、プライバシー保護のために姓のみにとどめた。

1. 劉さん 76歳 (1929年生まれ 妻 (1931年生まれ、74歳) と同伴で面接)

1) 金角事件についての見解

昨年著者のことを妻から聞き、「会いたかった、詳しく金角事件のことを話したかった」と切り出す。1992年に初めてこの事件の秘密を資料調査で知り、非常に憤慨していることや、この事件について説明をしておかないと聞けばこの事件の暴動で終わってしまうことを懸念している。1942年12月8日に世界大戦が始まり植民地の解放が終わった。1943年6月カイロ宣言があり、日本が負けたときに日本の植民地をどうするかが話し合われた。そのときに、台湾について、蒋介石は明治28年日清戦争で手にいれたので中国に返すことを主張したが、チャーチルの反対があり、カイロ宣言は不成立に終わっていた。1945年7月に大西洋憲章が発表され、75条、76条、77条植民地の項目に所属されている国は、その国へもどると書かれている。更に、所属されている国は、連合国の委託に基づいて住民の意識が芽ばえたと住民の公民投票で決めると記されている。しかし、1945年7月26日 ポツダム宣言でカイロ宣言に基づいて日本に受諾させるとしているが、カイロ宣言のないものを受諾させるのはおかしいのではないか？ アメリカは8月に原子爆弾を落とすことを決めていた。1945年8月15日に日本はポツダム宣言受諾したが、大運営当局は良くわからなかったのではないか？ 終戦後日本は台湾について何も話していない。台湾との関係？その後の台湾は？1949年の49ヶ国サンフランシスコ平和条約で中華人民共和国成立したが、当時中華民国は内戦状態であり平和条約の資格ないと言われた。サンフランシスコ平和条約第2条に台湾はすべて権力放棄すると記されているがその後のことについて書かれていない。1951年に中華人民共和国がでてきた。当時の中華民国は、日本と単独で平和条約を結んだ。1972年の日中国交でも、同じように書かれている。台湾は中国のものか。李登輝は、日本で台湾人の悲哀について話したが、日本は何も話していない。

台湾は、20年間蒋介石の国民党の権軍下にあったが、台湾が中国に属していないことを一番知っていたのは蒋介石である。アメリカ特殊秘密は30年間すればオープンすると言われていた。これがわかれば、蒋介石が台湾にいる正当性がないため、正当化させる手段のために手を打った。2.28事件は突発事件(1年4カ月間)でこの間台湾の英雄がすべて殺されたが、蒋介石は、台湾の学識のあるものに秘密を暴露されるのを防ぐ手段にした。自分たちは、知るのが遅かった。

50年間の日本の植民地時代で92%の教育普及率と高等教育を受けた人は沢山いた。台湾は中国ではないからこうなった。1979年キンジャナーの米中条約で台湾は中国の1国としての見解がでてきて元総理の田中も承認した。日本が負けたのが8月15日から台湾が中国人になった10月5日まで(50日間)台湾は無戦状態この間日本人と和気藹々とすごしてきた。植民地政策で、少しきびしかったかもしれないが日本人として生活をしてきた。2.28事件の本質を知って欲しい。

2) 劉さんの生活

妻とマンションで生活。子供は4人で3人の娘と息子がいるが独立している。夫の年金（日本のお金で約10万円）で生活しているが、息子から5万円の小遣いをもらっている。「ニコニコして渡してくれる息子の笑顔がうれしくてもらっている」と妻は話す。息子夫婦とは、日本語教育を受けたものと北京語教育を受けたものとは、教育が違うということで、最初から別居生活である。台北市に住んでいる息子は、月に1回くらい劉さんたちをドライブに誘う。台北出身で、数年前から2.28記念館のボランティアに参加している。劉さんは台湾語の勉強を昨年からはじめ、台湾語文学会の研修にも妻と一緒に参加している。

劉さんは、日本でエンジニアとして働いていたときに、印刷で青写真をとり、目に水がたまり、黒目が見えないため焦点があわない。そのためにコンピューターが使用できず、資料を捜すのに苦勞をしている。妻は、膝痛があり、外の歩行時、段差のあるところで劉さんの手をかりている。食事については、日本食の薄味に気を使っており、日本のNHK番組をいつも見ている。1日30～40分妻と一緒に散歩している。

2. 蕭さん 81歳（1925年生まれ）

1) 金角事件についての見解

金角事件で弟が銃殺され、蕭さんが勤めていた新聞社が2.28事件で倒産した。新聞社を捜していたら縄でつながれたが、事件が終わり銃殺される一歩前で助かった。父親は第1師範学校の助教授であったが、昭和6年に肺結核で死亡した（蕭さん4歳）。1942年日本兵としてビルマへ志願した（4年間活躍）。戦地へ行く前、シンガポールで受けた3ヶ月軍事訓練で日本の植民地政策がいかに良いかがわかった。台湾の教育は87%実施されているのに200年もイギリスの植民地であったシガポールは10分の1しか教育を受けていない。今でも日本人だと思っているが、戦後50年後に貯金しておいたお金の120倍がもどってきただけである。アメリカは1940年に総督府の写真をとっていき、1945年5月31日に総督府を爆撃にきた。1941年12月5日の真珠湾攻撃は、日本は戦争を避けるために1941年2回に分けて大使を派遣し、講話条件を持っていったのにルーズベルトが受けつけなかったためのもがきの結果である。だから日本が戦争をぶつけたのでないことを教えなかった戦後の日本の教育は間違っている。2.28記念館や総督府でボランティアをやりながら日本人に道徳を教えている。携帯の国際電話で日本の友人とも交流が多く、また326デモ³⁾の声援依頼の手紙を約100通出した。

2) 蕭さんの生活

6人の子供がいて次男家族と末娘との同居である（娘4人、息子2人）。年金はなく、長男から時々小遣いをもらうが（食事の足し程度）、催促はしない。末娘は体が弱く入退院を繰り返しているために、蕭さんの悩みの種となっている。蕭さん自身は、健康第一を考え、朝3時半に起床し、1時間体操をして汗を流し、シャワーを浴びボランティアに出かける。夜は遅くても9時に寝る。朝食なしの2食主義で、調子が悪いときは絶食で治す。カルシウムを多くとり骨粗鬆症の予防に努めている。家で血圧と血糖（米国の試験紙）を測定し、時間がないので検診をしないし、医者にも行かない。日本のように年金がなく、経済的に不安定であり、老人ホームも私立が多いのでお金がないと入れない。在宅療養は望まない。健康でなければ、子供に迷惑がかかるし、やるだけのことをやり、社会に迷惑をかけるようになったら、遺書を書い

て用意してある薬を飲んで帰ると言い切る。

3. 施さん 75歳 (1930年生まれ)

1) 金角事件についての見解

「自力更生」の理念で建てられた私立愛愛院の次女。父が1944年に脳溢血で死亡し、日本人の母は路頭に迷うが、姉と一緒に母を支え今日の私立愛愛院へと発展させる。母は当時34歳の若さで子供が6人いた（末子が息子1人で4歳、現在の院長）。終戦後（1945年）、日本人は送還されることになったが、母は子供と200人の収容者のために台湾に残り、夫の意思をついで施設を運営してきた。その当時、姉（現在81歳）は1944年に19歳の時に広東第一陸軍病院の看護助手として日本のために働いた。戦争に負けて、台湾にすぐに帰れず、大陸に連れていかれ、翌年1946年に台湾へ帰ってきた。次女は日本赤十字で看護婦の勉強をしていた。母は日本人であるため、施設の職員から「出て行け」と言われ、つばをはかれ、おろおろして次女に電話をしてきた。そのつど母を励まし、今でも姉と次女は「母がえらかった」と回顧する。私立愛愛院は、台北市の大理街にあり、228事件の淡水に近い。入所者はそのころ大陸からの人々で、貧しかった。台北市と台湾省から甲種の認定（優良な施設に認定）を受けながら私立愛愛院は役割を果たしているが、姉は現在一切施設運営に関与したがない。しかし、姉の娘の1人は、228記念館で働き、もう1人は日本に嫁いでいる。

2) 施さんの生活

施さんは愛愛院の近くに住んでおり、ボランティア（報酬あり）として毎日私立愛愛院に顔を出す。インタビュー時大腿骨折で室内を車いすで生活をしていた。院長夫婦と息子それに施さんの娘も一緒に働いている。週末は姉弟で夜中まで麻雀をやる中である。日本人がくると母が喜んで接待していたことが今も施さんたちに引き継がれているために、日本人の研究者の訪問も多い。

台湾の人は健康であれば病院へ行かない。65歳以上は年に1回無料で尿、血液、レントゲンの検査ができ、それを利用している。医療保険があるので院長は1回受診で150元払うくらいで安い。

タバコの値上げがあり、入所者のために息子が遠くまで行き少しでも安く買ってきてあげる。入所者には、趣味、嗜好品等好きなようにさせたら良いと施さんは考えている。

近所での挨拶は、親しい人でもいいことしか言わないし、入所者についても「みれなくなった」の確認程度である。筆者が地域の調査を依頼したが、台湾では家庭調査をしようとする、「家庭の中をのぞかれるのではなか」と怒られから難しいとの返答が返ってきた。

愛愛院を出て分かれるとき、今から食事をつくらなければならないと、手押し車を押して反対方向へ帰られた。

IV. 台湾の高齢者の意識の枠組み

インタビューによる4人の逐語記録より、「高齢者の意識」を積極的に表わしていると考えられる下線部分から51のコードが抽出された。そこから解釈後、類似性に基づき5つのサブカテゴリーに分類された（図1）。更に、自分の意思の主張の「個人の自律」、社会との関わり、日本と関わりの「社会的関心」、家族との関わり、健康との関わりの「生活の充実」の3つのカテゴリー

リーに大別できた。図2)。

1. 個人の自律

「非常に憤慨している」「やるだけのことをやり」等の発言から個人の規範に従って行動している声が聞かれた。日本の高齢者と違って自分の基準がないと生活できないきびしい状況であったとも考えられる。しかし少なくとも台湾の高齢者には、オレム (Orem,D.E) のいうセルフケア能力を高める援助をしなくても、いいように思われる。一方日本では高齢者のことを

考えるとき、まずステレオタイプ化した高齢者をイメージする傾向にあると考える。日本では、100歳以上の高齢者が2万5,606人(2005年)⁹⁾を突破したという高齢社会で、医療費や年金の経済問題や介護問題等を必死で検討している。しかし、どの方向からメスをいければ、他の方向の者が痛みを味わうという折衝問題にすぎない。著者は、高齢者が、はっきりと大事な視点についてYESかNOを言える自律した高齢者にならなければならないと考える。そのために、子供から大人までの集まりの中で高齢者が意見を堂々と述べる場所の設定が必要である。当然高齢者にも信念を築く努力が必要である。その信念は、高齢者が最後まで社会参加できる生きがいにつながると考える。一方高齢者以外の者は、高齢者を尊重する気持ちが育たないといけない。昔の家制度の中での親の権威を言っているのではない。2007年から人口減少を始まる日本において、各年代の者にそれぞれの役割があり、高齢者を含めて一緒に考え、誰もが住みやすく、将来の発展のある日本になるようにしていく努力が必要であると考えます。

2. 社会的関心

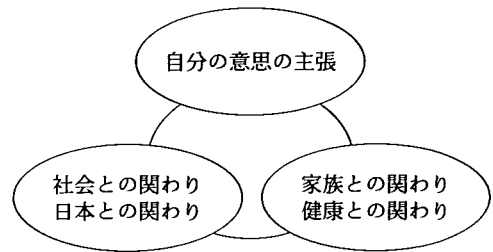
「説明をしておかないと」「日本の教育は間違っている」等、過去の政治への関心や日本の教育への関心を日本の一般の高齢者の中でこれほど熱っぽく話す人がいだろうか。

海外へ旅行すると日本の良さを発見したと語る日本人は多いが、それは表面的な一部である。日本の良さを語れない高齢者は、他の世代の日本人に優越できるものが何もないといって過言だろうか。日本の有名人としてではなく、一国民である歴史を背負う生き字引として、若い自分たちががんばってきたから今があることを伝えられないのだろうか。その結果が良くても悪くてもその後続く世代への針路になると確信している。

特に台湾の高齢者は、2.28事件、戒厳令の施行で抑圧されてきた人々がやっと発言できるとして、戦前の日本の植民地時代の日本の良さを伝えている。そのような事件に巻き込まれていたから発言したくなるのかもしれないが、日本の高齢者も今発言しなければならない時期にきていると考える。そうしないと根についた若者が育っていかない。日本の経済発展は一夜でできたとか、高齢者は若者の足ひっぱりだと錯覚され、日本の高齢者の住み心地が悪くなるのが懸念される。台湾の高齢者は、日本は強かった、教育もよかった等心底思っている、昨今の日本の中国への発言・態度には煮え切らないものがあり、今後の日本の将来について心配をしていた。

今後日本は近隣国や世界の人々と調和をして生きていかなければならないときに、歴史をつくってきた高齢者は、社会的関心を持ち、日本人のアイデンティティーを伝える役割があると

図2 台湾の高齢者の意識



考える。

3.生活の充実

「息子の笑顔がうれしくもらっている」「血圧と血糖を測定し」等の発言から、生活スタイルの維持のために家族との距離感や健康への配慮を台湾の高齢者自身が心がけていると感じる。

日本では、高齢者世帯や高齢者夫婦世帯が年々増加している。そして、2世帯や3世帯同居より、福祉の優遇措置が受けられるしくみになっている。確かに若者との同居で高齢者が忍耐強くがまんしていることも多く、かえって高齢者世帯や高齢者夫婦世帯の方が良い場合もある。一般的に日本の高齢者は、経済的にやむを得ないとか、高齢者になる以前からいずれ子供の世話にならなければならないという依存的な考えで生活スタイルを変更している傾向がみられる。このようなたれ合いの考えでは、高齢者自身がより体力低下していけば、高齢者の居場所の保障がなくなってくることもある。そうならないためにも、家庭において、子供が自立した後の生活スタイルを高齢期になっても責任を持って維持できるような工夫が必要ではないだろうか。維持できないと予測されるならば、早い時点でどうしたらよいかを、高齢者自身でしっかりと考える必要がある。そして高齢者だけでは解決できない問題については、話し合える仲間を増やし行政への積極的な意見を伝えることも重要となる。

V.まとめ

インタビュー者は4人とも74歳以上であるが、生き生きとした生活をしてきた。こちらからの半面構成インタビューに答えるために健康について話したが、まずは、4人とも信念を語り始めた。劉さんは、視野狭窄があり、不自由にもかかわらず、資料検索を続けていた。蕭さんは体の血流を促すために1時間ほど体操をやり、体を動きやすくしてからボランティア活動に出かけることを日課にしていた。施さんも車いすの生活をしながらも、筆者のことや入所者のこと、施設運営を考えていた。

その中で、抽出されたカテゴリーは、「個人の自律」、「社会的関心」、「生活の充実」の3つであることがわかった。

注

- 1) 厚生労働省2004年 簡易生命表
- 2) 厚生労働省2002年 国民生活基礎調査
- 3) 326デモは平成17年3月26日「反国家分裂法」の制定に反対して行われた。100万人デモ。
「反国家分裂法」は、台湾を「一国二制度」で中国に統一を促す内容。
- 4) 厚生労働省2005年 人口統計

参考文献

- 1) Nishi, K. & Tochimoto, C. :An Approach to Regional Rehabilitation Classes Aimed at Self-Initiated Participation by The Frail Elderly-Exploratory Study on Determinants For Participation in Rehabilitation Classes- Journal of Medical Welfare 1 (2005)

- 2) 孫得雄・張明正：台湾・台北の高齢化社会事情『都市の少子高齢化研究』エイジング総合研究センター（2000年）
- 3) Tochimoto ,T :A study on the Actual Situation of Elderly People in Taiwan-Based on the Results of a Survey in September 2004 愛知淑徳大学現代社会学部紀要（2005）
- 4) エイジング総合研究センター:台湾の人口高齢化と高齢者福祉平成8年度研究報告書センター
- 5) エイジング総合研究センター:東アジア地域の人口高齢化と社会変化2003
- 6) エイジング総合研究センター:都市の少子高齢化研究平成11年度研究報告書
- 7) E.O.コックス・R.J.パーソンズ著、小松源助監訳：高齢者エンパワーメントの基礎 相川書房（1997年）
- 8) 大久保洋子著：高齢者の自立と健康に関する研究—スエーデン・日本・台湾— 近代文藝社（1996年）
- 9) 一番ヶ瀬康子著：地域に福祉をい築く 旬報社（1994年）
- 10) 伊藤潔著：台湾—四百年の歴史と展望—中央新書（2000年）
- 11) 洪郁如著：近代台湾女性史—日本の植民地統治と「新女性」の誕生 勁草書房（2002年）